

而漢說之所可采者、則不過十之一耳、遂又專精乎家學、而不問厥它也、迄乎近時、余之術行、而疾人索治日盛、重有概乎夫二者也、乃旁求獲一二知己焉、於是乎稍々取其方書優柔厭厭、相詎相咨、玩惕居諸之際、正得以水釋理順焉、而后嘗試諸事之與物、則左右取之能逢其原、章々乎明如觀火矣、因取解體之書、依其成說、解剖而視、則無一所失焉、臟腑竅關骨髓脈絡、始得識其位置整列、豈不踴快乎、以是觀漢說、則其前者近于是、而後者不遠于非也、唯靈樞中有解剖而視之語、則漢人古必有其法焉、後人不得其傳、徒信糟粕而爲無稽之言、數千年來、竟不識其面目、豈不哀哉、按解體瘍科之要、不可不知焉、諸證之所在、外此而無可知焉、蘭人之致精巧、亦防乎斯、故欲能進于醫焉者、苟非淵源于此、則決弗能也、而我方之醫、恬不之省者、果何心哉、宜矣、其不成刮骨之功也、余○杉田玄白故於蘭書之中、特拔是爲翻譯、範初學、塗轍一定、聰明以生、過此以往、生死肉骨之妙、庶可得而至焉、嗚乎、余業之及于斯、實藉天之寵靈也、豈人力之所能致乎哉、天下之有心乎斯道者、則我竊自比郭隗矣、如以是受四方之譏、所不辭也、○下略

〔蘭學事始〕下一通り譯書出來たれども、其頃は、蘭說といふ事、少しにても聞及び聞知る人絶てなく、世に公にせし後は、漢說のみ主張する人は、其精粗を辨せず、これ胡說なりと、驚き怪みて見る人もなかるべしと思ひ、先づ解體約圖と云ものを開版して、世に示せり、是は俗間にいふ、報帖同様のものにてありたり、此業江戸にて首唱し、二三年も過し、年々拜禮に參向する阿蘭陀便詞家などにては、忌み憎みしよし、左もあるべし、如何さま其ころまで、は彼家々は、通詞迄の事にて、書物讀みて翻譯する杯といふこともなかりし時節にて、冷めしなむめしといひ、一部一篇と譯すべきエロヘたり、尤醫說内景杯の事に至りては、誰一人知る人なき筈なり、或譯る事、此約圖を見て、ゲルといふものは、身體中にはなし、ガルの誤なるべし、ガルは即ち膽なりと不審せしとなり、但此前後よりして、翁が輩、關東にて創業の一擧ありしにより、其根元たる、西肥の通詞輩の志を、大に引立しこと知るべしなり、

〔近世名醫傳〕小石元俊 子元瑞